

# 琉球大学学術リポジトリ

## 社会学的な新自由主義の歴史-文化社会学における支配-自由に関する考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 九州地区国立大学間の連携事業に係る企画委員会リポジトリ部会 公開日: 2020-03-19 キーワード: 新自由主義, 支配-自由 作成者: 石田, 一之, Ishida, Kazuyuki メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/45325">http://hdl.handle.net/20.500.12000/45325</a>

# 社会学的新自由主義の歴史-文化社会学

## における支配-自由に関する考察

石田 一之\*

はじめに

本稿は、ドイツ語圏における新自由主義の基盤を形成し、現実の経済的实践にも影響を与えた論者のなかで、みずからの主張を歴史-文化社会学の視点から基礎づけようとしたアレクサンダー・リュストウ(Alexander Rüstow)の代表作『現代の位置づけ』<sup>1</sup>、並びにその他の著作の検討を通して、歴史-文化社会学的立場に立脚した視点から人間の自由を考察し、それとともに、現代における人間の文化的・社会学的状况に関して自由の視点から示唆を得ようとするものである。

戦後西ドイツにおいて、また統一後ドイツにおいても新自由主義は、経済復興並びにその後の経済-社会政策形成の上でも重要な影響力を持っているとすることができる。リュストウは、W.オイケン、W.レプケ、A.ミュラー＝アルマック、F.ボエームらと並んで、このようなドイツ語圏の新自由主義を形成した論者の一人に数えることができる。言うまでもなくこれらの論者に共通してあらわれるのは、市場経済を前面に打ち出し、経済過程において個々人のイニシアティブが十分に発揮できるような体制を構築してゆこうという主張に他ならない。だがそのよって立つ人間像や具体的な秩序像に関しては、それぞれの論者の間でかなりの相違がみられるのも事実である。リュストウがレプケらと並んで、ともに社会学的新自由主義(Soziologischer Neoliberalismus)と称される理由は、その内容豊かな人間観にもとづき、形式的な経済秩序問題に対して、独自の文化的・社会学的な視点からの考察が加えられる点に求めることができる<sup>2</sup>。

---

\*琉球大学 国際地域創造学部

<sup>1</sup> Rüstow, A.: *Ortsbestimmung der Gegenwart, -Eine universalgeschichtliche Kulturkritik, Bd. I. Ursprung der Herrschaft; Bd. II. Weg der Freiheit; Bd. III. Herrschaft oder Freiheit?*, Erlenbach-Zürich, Stuttgart, 1950 – 57.(以下 Rüstow, : *Ortsbestimmung* と略記する。)

<sup>2</sup> リュストウにおけるこのような側面を代表する事例として、人間の *Vitalsituation* という視点からの把握と、この視点から展開される政策提言として *Vitalpolitik* が挙げられる。vgl.: Rüstow A.: *Vitalpolitik gegen*

リュストウの代表作としてあげられるのは、彼がその自由主義の主張を歴史社会学的視点から基礎づけようとした全3巻からなる著書『現代の位置づけ』である。ここで彼は、豊富な資料に基づいて、歴史のうちに展開した人間の自由の運命を明らかにしようとしている。そしてその歴史の延長線上に現代という時代を位置づけようとする。しかもそれに際して、彼の歴史の射程範囲は一万年にも及んでいるのである。ところで、この「現代の位置づけ」全3巻のそれぞれの副題は、第1巻「支配の起源」、第2巻「自由の道」、第3巻「自由か支配か」、となっている。ここからもわかる通り、この著書において一貫している視点は、自由と、それを脅かす支配との対置構造のうちに歴史を捉えようという立場である。ここで第1巻においてリュストウは、自由と対置されるところの支配を自らの考察の主題とし、支配の歴史-文化社会学を展開している。それに際し彼は、支配をある歴史局面においてあらわれる特殊な現象として考えるのではなく、社会と不可分に結びつき、つねに社会に遍在する要因として考えているのである。このような支配の捉え方から、リュストウの自由の問題もまた明らかとなる。彼において、自由はつねに社会との緊張関係のうちにあるものと考えられるのである。

以下では、このようなリュストウの歴史-文化社会学という観点から捉えられた支配、並びに自由をめぐる諸相について明らかにしてゆきたい<sup>3</sup>。

## 第1節 支配の歴史-文化社会学の展開

### 1-1. リュストウの支配の概念について

上に述べたように、リュストウの経済・社会体制論を貫く重要な概念が支配であるが、それは二つの観点から捉えることができる。一つは歴史的観点であり、もう一つは構造論的観点である。

1. まず、歴史的に見て支配は、文明社会、すなわち高度文化(Hochkultur)<sup>4</sup>の発生とともにある。逆に言うならば、支配構造の発生と定着が社会の形成の前提条件であった。(歴史的観点) 2. 次に、一度発生した支配構造は、同時に社会の存続のための条件となる。支配とは、社会にとって不可欠の構造であり、社会が存続するところには必ず何らかの形で支

---

Vermassung.in Hunold, A. (hrsg.): *Masse und Demokratie*, Erlenbach -Zürich ,Stuttgart 1957, SS. 215-238. そして彼におけるこのような観念の形成に際しては、特にレフケとの交流が大きな影響を与えた。vgl. Repke, W.: *Civitas Humana*, 3. Aufl. Erlenbach-Zürich, 1947.

<sup>3</sup> 『現代の位置づけ』でとられた方法はアルフレッド・ウェーバーの歴史-文化社会学の方向を引き継いだものである。vgl. Alfred Weber: *Kulturgeschichte als Kulturosoziologie* .(Alfred Weber- Gesamtausgabe. Bd.1),herausgegeben von Eberhard Demm, Metropolis-Verlag, 1997

<sup>4</sup> ここに高度文化とは、ある一定以上の文化水準に達した社会すべてを包括する概念である。

配構造が存在する。(構造論的観点)

以下、この二つの観点にてらして、リュストウの支配の概念を明らかにしてゆきたい。

#### 1) 歴史的一発生史的観点

まず、歴史的、発生史的に支配という概念を明らかにするにあたって、リュストウは重層化(Überlagerung, Übersichtung)<sup>5</sup>という独特の説明原理を用いている。この重層化とは、従来同質であった社会構造のなかで、内的あるいは外的原因によって異質の要素が顕在化し、社会そのものが多層化するとともに互いの層の間に上下関係が生まれるような状況をさしている。この説明から明らかなように、重層化の原因は多様であり、それはまさに多様な形態をとって現われる。この多様性を視野におさめながら、一見無関係に見える歴史的諸現象を、リュストウは重層化という統一的な視点から捉えるのである。彼は、高度文化の歴史を規定した最も重要な現象としてこの重層化を挙げており、これに社会の発生を起因させるとともに、そこに社会の変動の最も大きな原因すら見ているといっても言い過ぎではない。

重層化のうち社会の発生という観点から問題とされるのは、外的要因によるものであった。文明社会の成立期において現われた異民族間の侵略という形態をリュストウは人類史上、一番最初の重層化の形態として挙げている<sup>6</sup>。

リュストウによれば、まさにこの社会の発生という点において重層化は、重要な役割を担っていた。それは、高度文化を成立させるための不可欠の前提条件であった。文化の成立は、重層化、すなわち異民族間の侵略の過程を通してもたらされたのであり、またこのような侵略という強制の過程なくして文化の形成はありえなかったのである。リュストウは、このような事実が、支配と社会との基本的な関係を明らかにするものであると言う。つまりかれは、支配が社会構造に対して根源的関係を持つということの歴史的根拠を、この重層化と社会の成立の関係のうちにみているのである。

そこでまず、文化発生に至るまでの重層化の過程についてリュストウに即してみたい。このような文明社会の発生へ至る先史段階を明らかにするにあたって、リュストウは、おもにウィーン民族学派の成果を基礎にしている。それに際し、彼は、ウィーン民族学派のいう民族混交や民族移動の過程をみずからの重層化という観点から体系化し、独自の類

---

<sup>5</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, I.S.58ff.

<sup>6</sup> リュストウにおいては、この発生史的観点が特に重要な位置を占めるものとなっているのだが、このことはまずもって彼の歴史的社會把握の基本的な立場とかかわってくる。すなわち彼は、社会(高度文化)の成立条件の分析、つまり彼の言う「歴史的根源からの理解」、をまっぴらしてはじめて、今日まで至る社会構造の解明が可能であると考えているのである。リュストウの歴史記述は、第四氷河期の自然環境の内に展開した遊牧民制の成立から始められ、そこから高度文化の成立に至るまでの過程が、民族学の資料に基づいて詳細に展開される。このような文明社会を形成するに至るまでの先史の解明、あるいは、先史から文明社会への転換の分析が、彼の場合には社会構造の分析にとって不可欠の要素となっているわけである。

型を展開する<sup>7</sup>。この類型によれば、まず先行的な形態として、文化の形成までには至らない民族混交の過程があった。彼はこれを前重層化(Vorüberlagerung)と呼び、a) 狩猟民族(Jäger)の原始的農耕民族(Pflanzer)への重層化と、b) 牛の放牧民族(Rinderhirten)の原始的農耕民族への重層化という2つの類型を挙げている。前者は、農耕段階をより高度なものにし、後者は、先史的な熱帯地方に未開な文化を成立させた。その次に現われたのが高度文化を成立させた早期重層化(Fruhüberlagerung)の過程であり、c) 牛の放牧民族の定着農耕民族(Bauern)への重層化であった。これは、紀元前4世紀頃にみられた民族移動をさしており、中央アジアからオリエント、インドへ、そして小アジアを越え、エーゲ海、ギリシアへ到達し、それぞれの地域において古代の先史的な高度文化を成立させた。

これらの先行的な重層化に続いて、現代にまで至る高度文化を成立させた重層化が現われる。リュストウによれば、騎馬民族(Equidenhirten)による定着農耕民族への重層化がこれであった。牛の放牧民族の移動に続いて、同じく中央アジアに源を持つ2回の大規模な遊牧民の移動が起こったのだが、今回は牛にかえて馬が輸送手段として用いられていた。まず、紀元前2000年頃には兵車に乗った民族の波が、そして紀元前1200年頃には騎馬にまたがった民族の波が現われ、これらの民族は、その移動の過程で、定着農耕民の大群と出会い、彼らに対して支配層として重層化した。しかもここに至って、文化を形成させるに十分な上層民と下層民の条件が満たされていた。牛から馬への転換は、上層民としての軍事的能力を飛躍的に増大させた一方、下層民の側でも文化を成立させるに十分な経済的生産能力を備えていたのである。

このように、文明社会の成立は、繰り返し現われた重層化の過程を通して、すなわち支配構造の定着を通してはじめて可能であった。リュストウは、歴史的先行条件として定着したこの支配の関係が、それによってもたらされた社会の基本的関係を、決定的に規定することとなったと考えるのである。

もっとも、重層化そのものは歴史的に一回限りのものではない。リュストウは、高度文化の歴史の展開のうちに重層化が繰り返し現れ、それが社会の構造変動に大きな影響を持っていたことを指摘している。これには外的要因によるものと内的要因によるものがあるが、まず外的要因によるものとしては、外部からの異民族の侵略という形態がこれに当たる。ヨーロッパの古代においては、2つの侵略戦争がこの外的重層化の例として挙げられている。すなわちペルシャのイオニアへの侵略(前546/45の破局)と、スパルタのアテネへの侵略(前404の破局)である<sup>8</sup>。これらの重層化は、先行的社会形態において実現されていた民主的組織を崩壊させ、新たに社会に支配構造を定着させたのである。さらにまた、リュストウによれば、絶対主義王政の下で行われた植民地帝国主義の動きは、まぎれもない重層化の過程であった<sup>9</sup>。ここにおいてもたらされたプランテーション方式の大農

<sup>7</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, I.SS.58-65, SS.74-83.

<sup>8</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II.S.66ff.

<sup>9</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II.S.314ff.

業経営の形態は、現代においても支配の構造として定着している。また、現代の旧植民地地域の重層構造が、この時期の重層化に依存していることは言うまでもない。

しかし、外部からの侵略という形態をとらなくとも、社会は、その支配構造を先鋭化させる傾向を持っている。このような内的要因による重層化の典型を、リュストウは専制的統治形態の出現の内にみている。ローマにおいて五賢帝時代の後にみられた軍人皇帝の出現(180/193の破局)はその最初の例である。ここにおいて皇帝は、「強盗の首領へと変じ、強盗団すなわち軍隊の頂点に立ち、帝国を君主化し、掠奪した」<sup>10</sup>のであった。それに伴って強圧的に変じた社会の支配構造が現われる。リュストウによれば、この重層化こそまさに、「古代の没落」への契機をなすものに他ならなかった。

絶対主義王制の出現もこの内的重層化の例として挙げることができる<sup>11</sup>。国家と教会という二つの勢力による権力の相互牽制と、それによって保たれていた中世的平衡が破壊された後、ここに絶対君主による一元的な支配の構造が現われたのである。また、さらにこの系列をたどっていくならば、より後期においては、フランス革命によってもたらされた民主的統治形態から、ジャコバニズムの専制主義的統治への転回(1792/93の破局)<sup>12</sup>が、これに属する。

## 2) 社会構造論的観点

重層化によって発生した階層的な社会構造は、重層構造(Überlagerungsstruktur)として社会に定着する。そればかりでなく、この構造は社会の存続のための条件にすらなる。リュストウの支配の構造論的分析は、この論理を明らかにするものであるが、それに際し彼は、文化ピラミッドの法則(Gesetz der Kulturpyramide)という独特の説明原理を持ち出している<sup>13</sup>。

この文化ピラミッドの法則は二つの構成要素からなっている。一つはある規模以上の人口数、そして二つめは、その規模を統合するための上下構造(支配-従属構造)の存在。この二つの要素を前提とすることによってはじめて、文化水準はある水準以上の高さに到達することができるというのである。この論理はさらに次のように説明される。すなわち、文化の形成には生産活動から解放された社会層の存在が必要とされるが、そのためにはまた、それに応じた「社会学的基礎平面」、つまり十分な余剰を産み出すだけの大規模な人口数が前提とされねばならない。もっとも、組織化されない大人口の存在そのものは、文化形成の条件とはならない。人口を統合する権力の存在が必要となる。なぜなら人口を高度文化のための基礎平面とするには、上からの指導による分業と特化の形成が不可欠であり、またそこからもたらされる余剰が、効率的にすべて上の層にすいあげられ、それが統

<sup>10</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II.S.183.

<sup>11</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II.S.304ff.

<sup>12</sup> リュストウは言う。「革命の第一局面は、重層構造の封建的、全体主義的な弊害に向かっていた。……しかし第二局面において革命は、その役割を転じられ、重層化圧力の残忍な上昇と強化を伴った対抗的重層化(Gegen-Überlagerung)へと急変した。」(Rüstow : *Ortsbestimmung*, II.SS.425-426.)

<sup>13</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, I.SS.39-41.

一的な意志のもとに整理される必要があるからである。そのことによって始めて文明は成立しうる。

この文化ピラミッドの法則は、未開社会が長期にわたって文明を生みださなかった理由を明らかにする<sup>14</sup>。高度文化形成以前においては、小規模な集団が乱立していた。そういった集団は、人口数の上で分業と特化に至ることができず、それゆえ必然的に、相応の低い文化水準につながり定められていた。また、このような集団のうちに上下関係がない限りにおいて、ある程度以上の集団の増加は、不可避的な集団の分裂を導く以外にはなかった。というのも、集団内での土地利用に限界があり、集団内のあるグループは他の土地に移らざるを得ないからである。高度文化の成立のためには、分裂の性向を持つ集団を統合する権力の存在が不可欠であり、それは強制的な過程によってもたらされる必要があった。そしてこの強制をもたらしたのが、他の社会集団による侵略の過程、すなわちリュストウの言う重層化の過程に他ならない<sup>15</sup>。

またこの文化ピラミッドの法則は、重層構造、すなわち支配構造が、社会と不可分に結びついて存在し続けることの説明をも与える。文化水準の高さを規定する社会学的基礎平面の広さは、支配と結びつくことによって始めて可能となったのであるが、文化水準を維持してゆくためには、底面の成立とともにその存続もまた不可決のものとなる。それに伴って社会の上下構造も維持されなければならないわけである。「一度到達された文化の高さは、それが相応の底面を持つ場合のみ維持されうる。もし底面の統一が解体され、破壊されれば、それに応じて文化水準の下降が生じる。なぜなら、文化水準の高さは、それに応じた分業の基盤と協同労働の基盤なしでは保持され得ないからである<sup>16</sup>。」この法則が示すように、リュストウの言う高度文化の存続のためには支配が必要であり、文明の発生以来今日に至るまで、支配構造は顕在的であれ、潜在的であれ、強圧的であれ、民主的に緩和されているものであれ存続し続けており、またしなければならない。

## 1 - 2. 支配の社会構造への帰結

高度文化の形成とともに、支配が社会に定着し、社会のさまざまな領域に対してその作用を及ぼす。本節では、1)精神、2)社会、3)国家、4)経済、の4つの観点からリュストウの支配の文化社会学の内容の再構成を試みる。

<sup>14</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, I.SS.39.

<sup>15</sup> これに関してリュストウは次のように言う。「(重層化によって)ここにはじめて政治的大組織、すなわち支配されたステップの広大な平面と、群居する多数の支配された住民とを伴った『王国』が生じた。重層化に際し、遊牧民に軍事上の優越性を付与した馬車の、そして後には乗馬の迅速性は、同時に彼らに広大な領域の長期にわたる軍事的、並びに行政的支配を可能ならしめた。この政治的-社会学的大領域が、一文化ピラミッドの法則にしたがえば一初めて高度文化の成立の可能性に対してもその基礎を提供した。それは、10万人にも及ぶ単一支配に従属する臣民によって、また、これらの大衆からの租税が少数の侵略層、支配層、ないしはその家長的-君主的指導者の手へ集中することによって可能となった。」(Rüstow : *Ortsbestimmung*, I.SS.77-78.)

<sup>16</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, I.S.259.

## 1) 精神 —外部道德の内部化—

第一の重要な観点は、社会構造への支配の定着が、社会を内面から規定する精神や文化の領域に与えた影響にかかわるものである。社会に定着した上下構造は、この領域においてそれに対応した関係を作り出した。リュストウは「外部道德の内部化」という概念をもってこのことを説明している<sup>17</sup>。

彼によれば、高度文化成立以前においては、ある共同体の内部に対して適用されるモラル、すなわち内部モラル(Innenmoral)と、共同体の外部に対して適用されるモラル、すなわち外部モラル(Außenmoral)とは全く異なった内容を持つのであった。内部に対しては、共同体の成員の連帯性に基づくゲマインシャフト的なモラルが適用されていた。これに対して、無謀な野蛮性や強制行為は対外的な関係に妥当するモラルにとどまっていた。

しかし高度文化の成立とともに、従来異質であった共同体が相互に上下関係に入ることによって、外部道德としての強制モラルが社会の内部に対しても適用されるようになる。外部道德は、社会の内的関係に入り込むのである。「重層化とともに はじめて、まぎれもない外部道德の行為が、社会構成体の内部構造を規定し、そこに広範に作用する基礎となる。外部道德、すなわち強制モラルが はじめて、しかも支配的に、かつ強制的に、それによって作り出された社会の体内へと入り込む<sup>18</sup>。」これは、人間本性の基礎から決して失われることのない敵対的、寄生的傾向を文化に基づく原則にまで高めた歴史的転換点を意味している。

この外部道德の内部化は、高度文化の初期の段階とそれが成熟した段階とでは、若干その編成が異なっている。初期においては、社会の重層構造は上層民と下層民の間で完全に異質な層をなしていた。すなわち、社会の上下層がそれぞれに対応する異質の民族によって峻別され、それぞれに異なった言語、慣習、宗教によって特徴づけられていたのであり、この場合には、外部道德の内部化は直接的な強制の形で現われていた<sup>19</sup>。

しかし、社会の上層と下層とが互いに交流し、社会の上下構造が異種の民族によって峻別されることもなく、ともに一つの言語、宗教のもとに包括される段階に至ると、外部道德は、「物理的強制と無制限の権力利用」の段階から、「倫理—宗教的統合」の段階へと至る<sup>20</sup>。そこにおいては、初期の外的強制によって強いられた服従が、次第に、宗教と道德に根拠を持つ服従者の意識的義務へと変化する<sup>21</sup>。この段階では、人間のすべての精神の内

<sup>17</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, I.S.95ff.

<sup>18</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, I.S.95.

<sup>19</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, I.S.97.

<sup>20</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, I.S.100.

<sup>21</sup> リュストウは言う。「原初的侵略の痕跡が消えてなくなるまさにその程度において、外部道德の社会的毒素が、どんどん社会組織の内部へ、その血液循環、心臓、脳の内へと入り込み、そこでゆっくりと、はじめは認めがたく、内部から毒殺し、分解し、破壊するように作用する。重層化の血なまぐさい強制行為

に、支配の構造が定着することとなる。

## 2) 社会 —ゲゼルシャフト化—

支配は、従来のゲマインシャフトのなかへゲゼルシャフトリッヒな様成要素を組み入れた。まず、高度文化が成立する以前の状態について、リュストウはこれをゲマインシャフトと特徴づけている<sup>22</sup>。このゲマインシャフトを構成原理とする社会形態は、また、リュストウが *Vitalsituation*<sup>23</sup> という概念をもって捉える、人間の社会的な状態にとって最適な社会形態をも意味する。この社会の特徴をなしているのは、生活領域の内的緊密性、並びにその概観可能性であり、そこにおいては、その成員がお互いに「直接的に人格的な関係」<sup>24</sup> に立つことができる。このようなゲマインシャフトへの埋め込みを通してはじめて、人間はその社会的本性を満たすことができ、同時に責任意識、生活の安定、精神の平静を確保することができる。このような状況が人間の *Vitalsituation* を満足させるのである。

ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへの歩みは、高度文化の成立の直接的な帰結と云ってよいものである<sup>25</sup>。つまりそれは、文明社会の成立、並びにその存立のための不可欠の前提である社会の大規模化とかかわっている。さきに述べた文化ピラミッドの法則から明らかのように、文明を成立させるためには、社会は底面の広がりが必要とする。そして社会のこの底面の拡大のためには、多くの小規模なゲマインシャフトを、強制的に連結させる必要があった。ここにおいてゲマインシャフトの成員は、見知らぬ人間に対する従属を強制される。と同時に、人格的關係を持たない互いに疎遠な人間どうしが、強制によって結びつけられることとなった。したがって、底面の拡大に伴う社会の大規模化は、人間の社会的本性の要求する諸条件と対立し、社会に緊張關係を持ち込むことになった。これがリュストウのいうゲゼルシャフト化に他ならない。

文化ピラミッドの法則にてらして、これもまた文明社会の成立、並びに存続の基盤である分業化や都市化は、もしそれが極端に進展するならば、ゲゼルシャフト化のより進んだ形態をもたらす<sup>26</sup>。ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへの解体の究極状況は、社会のものはやそれ以上分解できない構成要素への解体、すなわち完全に孤立した個(*Individuen*)への

---

は、その時から、固有の社会的墮罪の役割を演ずることとなる。これは、先祖からの崇り、原罪として、たとえ隠されているとしても、そこから生じたあらゆるものの上に積み重なってゆくのである。」(Rüstow : *Ortsbestimmung*, I.S.98.)

<sup>22</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, I.S.109ff.ここで言うゲマインシャフトとゲゼルシャフトは、テンニースから転用したものである。Vgl. Tönnies,F.:*Gemeinschaft und Gesellschaft: Grundbegriffe der reinen Soziologie*. 8.Aufl. Leipzig 1935.(杉之原寿一訳『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』上下、岩波書店 1957。)

<sup>23</sup> この *vital* という概念に関してリュストウは次のように言う。「*vital* とは、*vits humana*—すなわち人間の生活、人間たるに値する生活を促進するものである。」Rüstow, A.: *Paläo- liberarismus Kommunismus und Neoliberalismus*. In: *Wirtschaft, Gesellschaft und Kultur(Festgabe für Alfred Müller-Armack)*,Berlin 1961.

<sup>24</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, I.S.109.

<sup>25</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, I.SS.109-110.

<sup>26</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, I.S.111ff,S.260, III,SS.139-158.

解体であり、孤立化(Vereinzellung)、ないしは原子化(Atomisierung)と呼ばれるものである。そして、これに対応する社会形態がマス化(Vermassung)である。そこでは社会とは個の単なる集積であり、個を超えたいかなる内容も実体も持ちえない。この典型は現代の大都市の状況の内に見ることができ、リュストウは、そこにおける人間について次のように表現している。「(彼にとって) そばにいるごくみじかな小家族のみが親しい存在にとどまる。しかし、この家族自身も多様に引き裂かれ、解体されている。近隣の人や仕事仲間は絶えず変化し、通りや市街電車で群がる人々と同様に面識はない。すしずめにされた大衆は、互いに見知らぬ人間たちである。貸アパートという不安定な住い、工場・事務所での不安定かつ不確実な労働、パート労働、それらのものの意味や成果を彼らは目にすることが出来ない。あらゆる個人は、彼らの視界の外部にある巨大な集団の中の一人なのである<sup>27</sup>。」

このようなマス化した社会の状態を人々の統合の観点から捉えると、それは過少統合(Unterintegration)と表現されるものである<sup>28</sup>。そしてこの過少統合の状態に対しては、社会の上層の側からも下層の側からも反作用が起こる。まずこの過少統合は、社会の統一的な統御を害し、さらには社会の効率性を疎外するがゆえに、上層は補完的な新しい統合の形態を追求しようとする。そしてその手段として、人工的に、外敵に対する共通の憎悪を高めたり<sup>29</sup>、全体国家を要請しようとする。しかしこのようなみせかけの統合は、本来の自然な統合を越えてより極端化することになる。過剰統合(Überintegration)の状態とはこれを指す。また社会の下層の側では、その社会的本性より、統合の欠如に対しては、何らかの新しい統合を求める渴望が生じる。その場合、この過剰な渴望のゆえに、提示された統合手段の質に対しては無批判にこれを受け入れる。みせかけの統合でさえ社会的麻酔剤となるのである<sup>30</sup>。ここにマス化社会が、つねに全体社会へと極端化する危険を内に秘めていることが明らかとなる。これら過少統合と過剰統合とはいずれも欠陥統合(Fehlintegration)であり、これに対して自然の健全な統合状態への帰還がもとめられるのである<sup>31</sup>。

<sup>27</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, I.S.264.

<sup>28</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, I.S.111ff.

<sup>29</sup> これにあたるものとしてリュストウは、近代ナショナリズムや戦争熱狂を挙げている。Rüstow : *Ortsbestimmung*, III.SS.269-290.

<sup>30</sup> リュストウは言う。「一般に、行為する大衆(Masse)においては、その特徴を成しているところの、我々の言う持続的な過少統合の大衆から、些細なことで、さまざまな種類の過剰統合の大衆へと急変するということが問題である。というのも、大衆は、その過少統合のゆえに過剰統合の麻酔剤に対してはとりわけ敏感になっているし、それどころか、過少統合の煩わしい状態から抜け出すためにまさにそれを熱望することにもなりうるからである。」(Rüstow : *Ortsbestimmung*, III.S.118)

<sup>31</sup> このように、リュストウにあっては、ゲマインシャフトとしての自然な統合状態が、高度文化成立以前に存在していた理想的な状態として設定されている。ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへという動きは、歴史的に基礎づけられているとはいうものの、原初的理想状態から原罪にいろどられた状態へという図式を反映している。これは、ルソーなどの自然状態に特徴的な方法であり、リュストウもその影響を受けているとすることができよう。

### 3) 国家 一階級国家化一

重層構造は、国家に階級的な要素を持ち込む傾向を持つ。もっとも国家の概念は階級国家に限定されるものではない。国家とは、社会が「外部に対する独立性と内部に対する権限」とを保持する限り存在しているのである<sup>32</sup>。この意味で国家は重層構造よりも古く、また、人間とともに古い。

リュストウにおいては、支配が社会に定着する以前の共同体的組織もまた、国家としての機能と本質を保持していたと考えられる。それは、共同体の内においてまず未発達な萌芽的形式において現われ、自生的に発展した。リュストウは、重層化が行なわれる以前において例えば高度狩猟民制社会において見られたように、十分な指導性を備えた、真に考察に値する国家形態が存在していたことを指摘している<sup>33</sup>。彼は、このような重層構造定着以前にみられた国家の形態を、重層化以後に現われる階級国家に対して、共同体国家(Gemeinschaftstaat)と表現している。

階級国家は、国家の歴史の上で 2 次的に、かつ強制的にもたらされたものと言える。しかも、それは従来の共同体国家の要素を完全に排除しうるものではない。階級的支配の国家形態は、共同体へと方向づけられた人間の Vitalsituation から見れば、「全く不自然、かつ常軌を逸した」ものであることは否定しようがない<sup>34</sup>。それのみによっては社会を維持することは出来ないのであり、何らかの共同体的要素の組み入れが不可欠となってくる。リュストウにあっては、むしろ国家の本質は共同体国家に属するもので、階級国家はその歴史的一形態にすぎない。ここに高度文化の国家とは、階級的要素と共同体的要素の両極性を含んだ形態とならざるをえない。後者なしに国家の存続は維持できないのである。リュストウは、文明社会に不可欠な社会のハイアラキーを維持するものとして、この両極的事実にそれぞれ対応するかたちで、「不当な支配者の権利(angemaßte Herrenrechte)」と、「委託された指導者の義務(anvertraute Führerplichten)」という 2 つの形式を区別している<sup>35</sup>。

もっとも歴史的にみるならば、高度文化において現われた国家においては、階級的支配の要素が優勢であった。しかし、国家の両極的事実に対応して、この要素に対する反発はつねに存在する。こうした対抗傾向として、上層者の支配裁量排除の傾向が強まってきた

---

<sup>32</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, I.S.118.

<sup>33</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, I.S.118.

<sup>34</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, I.S.104.

<sup>35</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, I.S.100.

のだが、これは「民主化への傾向」と呼んでよいものである<sup>36</sup>。別の言葉で置き換えれば、不当な支配者の権利が、委託された指導者の義務によって置きかえられてきたと言うことができよう。

この傾向の内に属するのが「法治国家への傾向」である<sup>37</sup>。法治国家においては、上層者の支配裁量の行使は、形式的に法律という堅固な規則と手続きに結びつけられる。それによって、恣意的な強制の行使はもはや不可能となる。もっとも、初期において法は、それ以前に存在した不平等の定式化を意味したにすぎない。しかし、そこから間接的かつ漸次的にはあるにせよ、法に伴う形式主義は、実質的正当性への傾向をも呼びおこしたのである。

国家の権限を民衆からの意思の反映で実現しようとする「民主主義(Demokratie)」は、この民主化の究極の形態に他ならない。ここでは、党派制の活動規則に従って、順ぐりに国家権力の多数的所有が行なわれる。従って、誰もが何らかの党の構成員として、権力に近づくチャンスを持っている。しかしこの形態ですら「不当な支配権」の要素を内に含んでおり、国家の多元主義的な展開はこういった事態を引き起こす典型的な事例である。「民主主義の内民主主義的方法によって行動する者は、この彼の目的の為に、何とかして議会の多数を獲得することを几帳面に配慮する。多数原理のこのような技術的形式的克服によって彼は、概して彼の民主主義的義務を残りなく満たしていると信じている。しかし彼が初めて多数を握ったとき、一征服されたる者は不幸なるかな(vae victis!)。多数党(またはその代表者)は、よき民主主義の良心の油から、憲法に基づく権力の地位に深く就くことになり、またこの票決の神的判断によって下位に置かれた少数者は、今や一もっともたいていは予算期のみだが一恐れをもって新しい重層化を耐えしのばなければならない。人はそのような市民民主主義的統治体制を、まさに順ぐりの多数的重層化と定義できる<sup>38</sup>。」

このように、階級性を排除しようとして出てきた民主主義においても、別の意味での新たな階級構造が現出する。重層構造は、社会が存続する限り存在するのであり、民主主義をもその一形態として含みうるものと見ることができる。

#### 4) 経済 — 所有と所得の分配の不平等と大経営の発生 —

社会構造における上下構造は、経済的關係についてみれば、所有と所得の分配の不平等へとつながる。もっともこの不平等の現われかたは、歴史の局面においてさまざまな形をとる。まず、重層化後の初期の段階において、上層民と下層民の経済的關係を規定していたのは、直接的な搾取関係であった<sup>39</sup>。そこでは上層民は、下層民が自己の生存最低限を越

---

<sup>36</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, I.SS.207-209.

<sup>37</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, I.SS.226-228.これと並んでリュストウは、民主化への傾向の重要な契機となったものとして、官僚制の展開や、徴兵制の採用を挙げている。Rüstow : *Ortsbestimmung*, I.SS.241-248.

<sup>38</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, I.S.120.

<sup>39</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, I.S.161.

えて生産した剰余を、強制的に略取した。この行為は、下層民に対する上層民の直接的な命令による強制のもとに一方的に行なわれ、その限りにおいて、土地所有権という概念もほとんど意味を持たなかった。

このような上層民による直接的な強制の行使という初期的な形態は、多様な動揺を伴いつつも崩壊するに至る<sup>40</sup>。そしてこの状況の変化に対応して、上層民は自らの支配者所得の取得を確実なものとするために、土地に対する支配所有の構造を法的に整えようとする。ここに、社会構造の上下関係が、土地所有の不平等という純粋に経済的な関係の内にも定着することとなる。この所有の不平等は、土地の所有にとどまらず、その上に産みだされた生産手段（資本）の所有の不平等にもつながる。そしてこれらの所有の不平等に基づいて、上層者は、無労働の地代収入をつねに取得することが可能となったのである。

もっとも、このような権力による富の分配の原則に対して、時代の推移とともに、新しい経済原則、すなわち経済的業績に従った市場経済的分配の原則が優勢となる。これは、近代の初期に見られた自由競争の経済体制に代表されるものであるが、そこでは従来の下層にあった者も、純粋に経済的業績に基づいて財産を取得することが可能となる。またそれに対応して上層民の側も、自己の経済的営為の失敗によってそれを失うこととなる<sup>41</sup>。しかし18世紀の自由主義経済学者が期待したような理想的な状況が、これによってもたらされるわけではない。下層民にとっては、経済的競争そのものに参加する機会が、上層民のそれに対して全く不利な状況におかれている。上層民の子孫は、経済的業績なくしても、自らの相続のみによって大きな財産配分を手にすることができ、それによって先天的に、比較にならないほど大きな経済的機会をも保持することが出来たからである。

さらに、資本主義の展開の前提となった資本の蓄積は、社会の上層下層構造を前提としてはじめて成立するものであった。この考えについては、次の表現の内によく表われている。「あたかも本源的蓄積が、このような「勤勉と儉約」という温和な方法によってもたらされたかのような言動は、マルクスからオッペンハイマーに至る諸論者によって、正当にも「子供の絵本」として嘲笑され、愚直な意図的虚構として正体をあばかれているのである<sup>42</sup>。」

このように経済の領域において上下構造は、仮に直接的な搾取という形態を離れたとしても、別のかたちで存続し続ける。上下構造を否定すべく登場した自由主義経済においても、特に所有と所得の分配の不平等という形でそれは残存し続ける。あるいは、市場主義にいろどられた資本主義の成立の前提としても、それは不可欠であった。原初的にみられた貴族制的構造は、それぞれの時代に支配的であった精神、あるいは慣習などの伝統を通

---

<sup>40</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, I.SS.161-162.

<sup>41</sup> リュストウはこのような上下構造の緩慢化と市場原則の支配をさして金権主義(Plutokratie)の確立と呼んでいる。(Rüstow : *Ortsbestimmung*, I.SS.229-238.)

<sup>42</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, I.S.163.

じ、こうした構造の金権主義的・市場主義的構造への変遷の後においても、今日に至るまで、なお保持され、存続するのである。

経済の領域において着目すべきもう一つの観点は、支配の定着によって可能となる大経営の発生についてのものである。そこでは、Vitalsituation の存立が危くなる。そしてこの傾向は、近代の成立とともにますます強まってくる。リュストウによれば、経営形態が農民的、手工業的な組織形態をとる限りにおいて、人間の Vitalsituation は侵害されない<sup>43</sup>。ここにおいてあらゆる農民、手工業者は、彼自身の家族経営の自立した中心者であり、また経営自身の社会的関係においても、小規模性と緊密性が保証されていた。初期の強制的な地代の搾取の状況においても、経済的な関係以外の領域は、個人の目己責任(eigene Verantwortlichkeit)と自己処分(eigene Disposition)に委ねられており、下層民は、経済的な賦役を与えさえすれば、その人格的側面まで拘束されることはなかった。いわばこのような経営形態が上層民の支配圧力に対する下層民の避難所」としての役割を果たしていたのである。「たとえ下層民に対して課される税が圧迫的な高さとなる場合でさえ、それは、せいぜい、労働支出と労働の純粋な収益との望ましくない量的関係であるにすぎない。それは、不作の場合とそれほどかわるものではなく、農民的一手工業的労働様式や生活様式への質的侵害へは至らない<sup>44</sup>。」

このような経済的下層民に対して少なくとも確保されていた Vitalsituation の根本的変更は、大経営という組織形態の出現とともに明らかとなる<sup>45</sup>。この大経営において労働者は、自己の農場あるいは仕事場での従来の家族的かつ有機的な労働環境から強制的に引き裂かれ、労働という、生活の最も重要な部分において、全く疎遠な人々とともに組織内に閉じ込められる。またそこにおいては日々の労働過程が上からの命令によって設定され、労働の日々の形成における他律性が明らかとなる。そこでは、労働時間、職場、労働環境、始業、終業、休息、労働のテンポ、リズム、労働の質、まさに労働そのものが、絶対的で持続的な従順を義務づけられるのである。さらに大経営は、より先鋭な労働分化への傾向を持つので、個人の労働はより部分的、特殊かつ単一的なものとなり、より変化の乏しいものとなる。ここにおいて労働は、それ自身意味を持つ生活の本質的で有機的な一部分から、目的のための単なる手段へと変質せざるを得ない。

以上述べてきたことから明らかなように、リュストウの支配の歴史-文化社会学の考察の第一の課題は、支配を遍在させるような社会の構造を明らかにする点にあった。そして第二の課題は、支配の構造が定着することによって、人間にとって何が損なわれたかを明らかにする点にあった。

---

<sup>43</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, I.S.167ff.

<sup>44</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, I.S.168.またこのことは、人間の法的地位にも左右されない。「vital で決定的な社会学上の差異は、法律上の自由、不自由のものではなく、家族的経営と大経営との間のものである。隷属的な農民は、その Vitalsituation からすれば、概して、現代のプランテーションや産業大経営の、法的には全く自由な労働者よりもはるかに自由であった。」(Rüstow : *Ortsbestimmung*, III.S.169.)

<sup>45</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, I.S.171ff.

## 第2節 自由の歴史-文化社会学の展開

『現代の位置づけ』第2巻で展開される歴史的考察において、リュストウにとって歴史-文化社会学的考察の課題とは、社会に定着した支配の中からいかにして自由の再獲得がなされうるのかを明らかにすることに他ならない。ここでは、アルフレッド・ウェーバーの歴史-文化社会学の方法を引き継ぐことによって、西洋を中心とした世界史のプロセスを、精神的自由と政治的自由とが相互作用する過程として捉えることが可能となっている。

### 2-1. 古代における精神的自由と政治的自由の展開

#### 1)古代ギリシャ

自由の世界史的展開という視点から重要なことは、古代ヨーロッパにおいて精神的自由と政治的自由が発現したことである<sup>46</sup>。古代ギリシャでは、対外貿易を基盤とした高度文化が形成され、その経済的基盤の上に精神的自由と政治的自由が発現した。リュストウは、このような西洋の精神的自由の起源を紀元前のイオニアに求めている<sup>47</sup>。イオニアは古代ギリシャに属し、この時代のギリシャ貿易は、東地中海及び近東の全文化圏を包括し、その取引相手はこれらの領域の支配層であり、彼らの支配者収入がギリシャ貿易人に流入した<sup>48</sup>。イオニアの都市国家は、上位におかれた封建的権力を持たず、貴族的大商人の寡頭民主主義によって治められていた。イオニアの自由主義はこれらの経済的基盤と政治的基盤に対する精神的上部構造として展開されたのである。この時代のイオニアの思想家の精神活動は、何らかの権力者や支配者の指図に従ってではなく、自己の意見に従って、精神の命ずるままに行なわれた<sup>49</sup>。

『イーリアス』から『オデッセイア』に至るホメーロス(Homerus)の紀元前8世紀とされる作品内部では社会構造の変化が反映されている<sup>50</sup>。しかしホメーロスの作品は自由精神的なものを示しながらも、同時に明白な貴族的性質を持つものである<sup>51</sup>。それに対して、紀元前7世紀以降にイオニアに現れた思想家並びに科学者達は精神的自由を体現するこ

<sup>46</sup> 一定の水準以上の文明を形成する高度文化においては一定規模以上の人口の集積と社会の階層構造を形成することが不可欠で、リュストウに従えば、そこでは自由は一般には発現することは困難であるとされる。

<sup>47</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung der Gegenwart*, II, S.56.イオニアは、エーゲ海に面したアナトリア半島(現在のトルコ)南西部に古代に存在した地方のことである。

<sup>48</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II, S.56.

<sup>49</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II, S.56.

<sup>50</sup> オデッセウス(Odysseus)は、『イーリアス』のアキレス(Achillius)が貴族的勇士であるのに対して、商人的で抜け目ない好奇心を持った人物として描かれている。また『オデッセイア』は英雄ばかりでなく商人向けとしても書かれており、その雰囲気は港湾都市や貿易都市で、貿易商人の都市貴族らから構成されている。(Rüstow : *Ortsbestimmung*, II, S.60.)

<sup>51</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II, S.60.

とになった。紀元前7世紀には、アルキロコス(Archilochos)が現れた<sup>52</sup>。ホメーロスの封建倫理に対して、アルキロコスは純粋に商業的立場に立ち、ホメーロスの上品さや従順さと対照をなす不従順さや自制心のなさを示した。そして、ホメーロスにみられる貴族的精神と伝統的な封建的文化に対して対立的立場を提示しているのはヘシオドス(Hesiod)である<sup>53</sup>。寄生的で強制的な封建制に対して、ヘシオドスは自意識的農民制の自由労働を賛美することにより、人間的労働の農民倫理を、貴族的・怠惰的な封建的労働蔑視と対置させている<sup>54</sup>。ヘシオドスは『農民暦』(Bauernkalender)を作成し、それと並んで農民的な質素で自明、控えめかつ熱心な日々の生活を叙述した<sup>55</sup>。

イオニアの精神的自由の潮流は、前546年前後に起きたアケメネス朝ペルシャによる侵攻の後しだいに衰退した。イオニアに続いて自由の精神的潮流の担い手の役割を担ったのは、アテネである<sup>56</sup>。ここにおいて、イオニアの精神的自由のアテネへの移植が重要な世界史的意義を持っていた<sup>57</sup>。イオニアの精神的自由の潮流は、前546/45年の崩壊と、それに続いて起こった前494年のミレトスの破壊によってその基礎となる土地を奪われていたからである。そしてアテネでは、民主主義的-自由主義的な政治を代表するものとして、ソロン(Solon)、クレイステネス(Kleisthenes)、ペリクレス(Perikles)という3人の代表的政治家が現れた。

アテネにおいて、前594年に政権を担ったソロンは、憲法の制定や民主主義化を推し進めた<sup>58</sup>。リュストウによれば、ソロンに見られた特徴として次のような点が挙げられる<sup>59</sup>。すなわち彼は、この時代におけるイオニア精神の偉大な代表者に属すること、それと同時にこのイオニア精神を自明にわがものとする方法によってアテネに移植したことである。そしてソロンは、社会構造における支配的要素を意識的に取り除くことによって、支配性と強制の到達しうる最小値に到達しようとした。ソロンの憲法によって作られた基礎は、それに続いたペイシストラトス派の潜主政治の期間においても形式上侵害されなかった。

---

<sup>52</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung, II*, S.60.

<sup>53</sup>ヘシオドスは神統系譜学においてホメーロスの神学に対抗しているばかりでなく、人間学においても対抗している。ホメーロスの純化された形式の封建倫理に対して、ヘシオドスはイオニア民主主義的精神に基づいている。( Rüstow : *Ortsbestimmung, II*, S.62.)

<sup>54</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung, II*, S.62.

<sup>55</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung, II*, S.62.

<sup>56</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung, II*, S.90f.

<sup>57</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung, II*, S.109.

<sup>58</sup> アテネにおいて、世襲の王制から選任されるアルコンへの推移は早期にかつ平和的になされたが、その後の金権化された貴族制の展開は、多くの農民的下層を負債、隷属の状態に押し下げることとなり、困難な社会的緊張へつながった。前636-32年には、この状況を君主制の建設に利用しようとするキュロン(Kylon)の反乱が生じた。この反乱は失敗に終わったが、それに続く社会不安をもたらした。ここに現れた下層民の経済状態の悪化と先鋭な社会対立を改革しようとしたのがソロンである。Rüstow : *Ortsbestimmung, II*, S.93.

<sup>59</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung, II*, S.93.

クレステネスは反封建主義的な制度改革をなし、合理主義的急進主義の特徴を持つ。彼は、僭主制の再現の脅威に対して、最も効果的と考えられる、そしてイオニアではすでに導入されていた、陶片裁判(Scherbengericht)の予防手段を用いた<sup>60</sup>。リュストウは、クレステネスとイオニアとの結びつきを述べている<sup>61</sup>。クレステネスの合理主義的急進主義は、彼以前においては、非進歩的であったアテネのあるアッチカ地方では育たなかったものである。彼は、イオニアに直接訪問することを通して、その精神的、政治的、社会的発展を吸収するとともに、当時のイオニアの自然科学者や思想家であるアナクシメネス (Anaximenes) やヘカタイオス(Hekataios)らと直接に接触し交流を深めたのである。

その後、アテネの発展が見られたのは、ペリクレスの時代である。ペリクレスは、アテナイに全盛時代をもたらした。そこでは憲法と民主主義が高度に発達し、自由と並んで生活水準の均等的形成が広範に見られた<sup>62</sup>。ペリクレスは、貴族制の除去と純粋なもともとも活気ある民主主義の具体化への移行を行った。ペリクレスにおけるこの移行的統合は、一回性と再現不可能性という圧倒的な魅力を保持していた<sup>63</sup>。しかし当時の民主主義のアテネは、発展の外的頂点におけるいかなる模範もない完全な政治的新創造の課題を伴いつつ、過度の自由と緊張の解けた状態の中でもたらされた危機の状態をも伴っていた。これはいわば鳥が新しい羽根をつける状況であり、内的弱さと抵抗力のない状況である<sup>64</sup>。この状況のなか、ペリクレスの死後、扇動政治家が現れた。またペロポネソス戦争に敗れたアテネでは、前404年、三十人僭主と呼ばれる寡頭制の政権が成立した。しかしリュストウによれば、この中間休止の後、前403年から企図された、熱心に取り組まれた民主主義的刷新の試みは、多くの健全な民主主義への諸力がアテネに存在していたことを示すものであった<sup>65</sup>。

## 2)古代ローマ

精神的自由の連続性という観点から、ギリシャと古代ローマとの歴史的関係においては、西洋の文化的遺産の継承という側面が重要である。この点に関して、ローマでは、スキピオ(Scipio)からアウグストゥス (Augustus)、マルクス・アウレリウス (Marc Aurel) に至る政治的指導層に、意識的な古典ギリシャを範とする精神がみられた<sup>66</sup>。スキピオ・

---

<sup>60</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II,S.99.ソロン制度改革は有機的-保守的で節度のあるものであったが、その結果、続く時代に君主制と封建的寡頭制への血なまぐさい転落が生じた。クレステネスの改革は急進的であり、同時代のイオニア合理主義の中で生まれた政治的闘技場の手段を用いることによって、それは意図された成果をもたらした。クレステネス以後のアテネにおいては、一時的な中間休止を除いて、君主制並びに寡頭制への転落は生じなかったのである。

<sup>61</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II,S.96.

<sup>62</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II,S.104.

<sup>63</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II,S.126.

<sup>64</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II,S.127.

<sup>65</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II,S.127.

<sup>66</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II,S.168.

アエミリアヌス(Scipio Aemilianus)と彼の同胞者達によって開始されたギリシャ文化の同時代におけるヘレニスティックな形式における受容は、約 100 年間続き、それはルクレティウス (Lucretius) とキケロ (Cicero) において頂点に達した<sup>67</sup>。

ローマの歴史はギリシャ文化圏の外部で推移した後、第 2 次ポエニ戦争でのカルタゴへの勝利 (前 219-201 年) の後、東方の高度に耕作された土地に戦闘を拡大していた。前 196 年のマケドニア<sup>68</sup>との会戦でのローマの戦勝の後、ローマ元老院は、ギリシャ諸都市を「自由」と宣する決議を宣言した<sup>69</sup>。ギリシャの諸都市から形成されるアカイア同盟 (achäischen Bunde)は、前 168 年のマケドニアとローマによるピュドナの戦いでローマを支援したが、前 146 年には、同じ土地に属するコリントはローマとの開戦に踏み切り、ローマの軍団により占領され、破壊された。そしてそれに続く 100 年の内にヘレニズムのほとんど全領域がローマの支配下に摂取された<sup>70</sup>。

ピュドナの戦い(前 168 年)の後、ローマはアカイア同盟に 1000 人の人質を要求し、その内にはギリシャの歴史家ポリュビオス(Polybios)がいた<sup>71</sup>。ポリュビオスは前 166 年にローマに来て、スキピオ家と交際し、スキピオ・アエミリアヌスはポリュビオスからソクラテスらの教義を学んだ<sup>72</sup>。スキピオ・アエミリアヌスが後に、彼の父たちや養子家族の伝統を継ぎ、彼の時代の最も偉大で成果を収めた司令官となった時、ローマの政治の方向を規定する数十年の間、彼の周りに重要な政治家たちの集団が形成され、このことを通してローマにおけるギリシャ文化の最高水準の受容がなされたのであった。

ローマのギリシャ化の初期における高度な政治的具体化がカエサル (Caesar) の時代であり、前 44 年の彼の死後の空白期の混乱を経てアウグストゥスが現れた<sup>73</sup>。アウグストゥスはローマの発展のなかで増大する東洋化的ヘレニスティックな方向に対して 2 つの「擬古主義」(Klassizismus) を対置させた<sup>74</sup>。すなわちローマ自身の過去の最高の理想と価値に新たに頼ること、並びにギリシャ古典作家の理想と価値に頼ることである。この結果、アウグストゥスの時代はまさに溢れるばかりの成果を与え、ペリクレスのアテネ時代と並んで、それまでの歴史上の頂点の 1 つを形成した<sup>75</sup>。

---

<sup>67</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II,S.168.

<sup>68</sup> アンティゴノス朝マケドニア

<sup>69</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II,S.166.

<sup>70</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II,S.166.

<sup>71</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II,S.167.

<sup>72</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II,S.167.

<sup>73</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II,S.169.

<sup>74</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II,S.169.

<sup>75</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II,S.169. アウグストゥスの文化政策は、東方からの文化の氾濫に対して堤防を対置するもので、それは 18 世紀まで保持された特殊な西洋的展開にとって、その自己維持および自己更新に対して重要な意味を持つ精神的作業であった。

また、西洋の文化遺産、精神的自由の連続的継承の観点から重要な概念として、「古典」(Klassischen)

アウグストゥスに続く時代には、社会的調節を内包する教義として新ストア主義が普及した<sup>76</sup>。新ストア主義の下方に向けてのプロパガンダは巡回牧師によって運搬され、キリスト教の倫理と近似し、その急進的な倫理的要求は皇帝や官吏側からみれば非常にやっかいなものであったので、哲学者に対する警察の手入れにまで至った<sup>77</sup>。ストア主義者セネカ (Seneca) は皇帝ネロ (Nero) の教育者並びに宰相となり、このことは哲学の王位の方向への最初の進撃を意味したが、後にセネカは失脚し、その後ヴェスパシアヌス (Vespasian) のもとで哲学者の一般的追放が起こった。しかしネルウァ (Nerva) 期において、新ストア主義が次第に承認され、「支配的な帝国の意向」となった<sup>78</sup>。ハドリアヌス (Hadrian) 以来、皇帝は哲学者の髭をつけるようになり、マルクス・アウレリウスは、解放奴隷であり彼によって尊敬された師、エピクテトス (Epictet) の主張した線に沿って、みずからの主張を展開した<sup>79</sup>。

精神的領域から社会構造に目を移すと、ギリシャのポリス的社会構造と同じ社会構造が、紀元 2 世紀頃のローマにおいて、形を変化させた関係の下で大きく普及していた<sup>80</sup>。また 2 世紀のローマ帝国は、都市国家の巨大な連邦の像を提供するものであった。そこでは都市の管理は、基本的に地方自治体自身に委ねられていた。個々の経済的、並びに社会的問題の解決に当たって、あらゆる都市は、その地域的自己管理の権限を有し、都市を越えて存在した強力な中央政府は、国家的業務としての対外関係、軍事、財政などを行っていた。帝国の官僚は非常に稀な場合以外は各都市の地域的業務に介入しなかった。都市の規模は例外を除いて小さな都市であって、閉じられた概観しうる生活領域を形成していた。都市の広範な行政的自立性は、中央集権的絶対主義に対する非常に望ましい対抗物を形成し、それによってさらなる持続的解放の要求は見いだされなかった<sup>81</sup>。

経済的・社会的領域において、これらの皇帝は、小経営と所有の平衡的分散を助勢した<sup>82</sup>。ハドリアヌスは、農業において小農業経営を要求し、小作人の地位を所有者の地位

---

の概念を挙げるができる。リュストウによれば、「古典」の概念は、アレキサンドリア市民によって最初に創造、定義され、そこで最初の構成的ヒューマニズムが形成された。アウグストゥス派の第 2 のヒューマニズムは、古典的価値をこの模範者に頼った。「古典」の概念は、古代ギリシャの文化遺産を中心に、総合的に 1 つの形象にまとめ上げられたものを指し、アウグストゥスの時代に形成されたこの「古典」の象は、後の 2000 年間に及ぶ西洋の精神史に刻印をなすこととなった。それはその後、18 世紀の後半以来、ドイツ古典派 (deutsche Klassik) の新人間主義 (Neuhumanismus) における「古典ーギリシャ自身への新たな立ち戻り」に際しても模範を与えたものである。ここにアテネ、スパルタ、テーベ、マケドニアなど諸国の間には成功しなかった総合が、古代ローマにおいて最も成果のある方法において遂行されたのである。

<sup>76</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II, S.171.

<sup>77</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II, S.171.

<sup>78</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II, S.172.

<sup>79</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II, S.172.

<sup>80</sup> すでにアウグストゥスの時代において、ローマ帝国は、まさに「自己統治する都市の連合」になろうとしていた。(Rüstow : *Ortsbestimmung*, II, S.172.)

<sup>81</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II, S.172.

<sup>82</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II, S.173.

に近づけた。また小経営者に対して炭坑を賃貸するシステムを、大経営者による奴隷と囚人を使用するシステムにかかわって持ち込んだ。トラヤヌス(Trajan)以後マルクス・アウレリウスまでの2世紀に出現した皇帝は「強者に対して弱者を、富者に対して貧者を守る」原則を採用し、この原則はハドリアヌス帝期にその現実の発現の場を見いだした<sup>83</sup>。このように紀元2世紀のローマは、「王位についての哲学者達の世紀」<sup>84</sup>であったのである。

### 3)古代の没落

古代ローマ帝国においては、あらゆる模範と十分な遺産のもとにおいても、今日の視点から、あらゆる民主主義的統御の中心点にあるべきものが欠如していた<sup>85</sup>。特に間接民主主義に関する組織技術の欠如は、ローマ帝国における構造的欠陥であった<sup>86</sup>。このことによって、民主主義的なものが、時代を通じて活気に満ちて存在しながら、それは善き意志と原則の内にも、危なっかしい方法において保持され、同時に全く制度的保証を持たなかったのである。従って、もしもそれ相応の素質を備えた皇帝が出現した場合、本人にとってはより快適で、楽しみの多い専制主義(Despotismus)への道が常に開かれていた<sup>87</sup>。

紀元180年のマルクス・アウレリウスの死後、初期ローマ帝政時代の君主制への滑り落ちが決定的に生じた。リュストウによれば、コンモドゥス(Commodus)の統治はすでに専制政治としての側面を多く持つものであったが、軍人皇帝の典型はセプティミウス・セウェルス(Septimius Severus)に始まる<sup>88</sup>。軍人皇帝においては軍隊が唯一の確実な権力の源泉となる。兵士の給料はセウェルスとカラカラ(Caracalla)のもとで明白に上昇し、それに応じて都市住民の租税負担も上昇した。また、この時代において、社会の階層構造において新たな階層構造の形成がみられた<sup>89</sup>。従来の特権階級、教養ある都市の市民、土地の所有者は、軍隊によって彼らの従来の権利を奪われ、しかし公的義務からは解放されなかった。彼らは、彼ら自身の租税負担のみでなく、彼らの領域内に住む下層民(humiliores)の租税も負担した。下層民はこの目的のために領土に結びつけられるか、強制ギルドに集中された<sup>90</sup>。帝国住民の租税負担力は、継続する外的並びに内的戦争によっ

---

<sup>83</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II,S.173.

<sup>84</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II,S.173.

<sup>85</sup> この点に関して、リュストウは、「古代ローマ帝国においては、当時の西洋の文化的人間性にとって非常に幸運な状態の継続と非継続は、王位継承という単なる偶発時に全面的に依存していた」と述べている。(Rüstow : *Ortsbestimmung*, II,S.181.)

<sup>86</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II,S.183.

<sup>87</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II,S.183.

<sup>88</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II,S.183.

<sup>89</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II,S.184.

<sup>90</sup> リュストウによれば、このような税の固定化を通して、アウレリアヌス(Aurelianus)期以降、世襲的国家奴隷を伴った階級国家(Kastenstaat)が生じた。この国家の基礎は下層民の強制労働と土地所有者の強制責任制によって形成されていた。(Rüstow : *Ortsbestimmung*, II,S.184.)

て下降した、一方、俸給つり上げと臨時給与による軍隊の計画的買収の政策の故に国家の財政需要はさらに高まった<sup>91</sup>。

## 2 - 2. 中世における精神的自由と政治的自由の展開

### 1) 古代から中世への西洋の文化的遺産の継承

精神的自由の連続性という視点から、全中世を通じて、西洋の文化的遺産の継承という形態のなかで精神的自由の連続性が見られた。ギリシャと古代ローマ帝国の達成した二つの偉大な世界史的業績としての西洋の精神的自由の遺産の引き継ぎにおいて、中世を通して重要な役割を担ったのはローマ教会であった<sup>92</sup>。ここに古代文化のすべての伝統がキリスト教と両立可能であったわけではないが、多くのものはキリスト教修道士の複製本の中で伝達されるなどの方法で継承、保持された<sup>93</sup>。ここにはまたローマ教会が、西ローマ帝国の異民族の侵略による崩壊に際しても同時に崩壊せず存続し得た理由も存在した。ローマ教会が神聖ローマ帝国の勢力に対抗して、全ヨーロッパにまで勢力を拡大し得た最大の理由は、これらの精神的・文化遺産を唯一保持する主体であった点に求めることができるのである。

### 2) キリスト教と教会

リュストウは、教会と国家の双方向的な独立性が、宗教改革まで続いた基本的構造として社会を規定し続けたとしている<sup>94</sup>。そしてこの二元論、すなわち権力の分割は、全中世を通じて、西洋の人間性に自由を保証し続けたものであった<sup>95</sup>。

紀元 180 年を境にして、ローマ帝国の状態はより悪化したのであり、社会の支配構造を強める圧力はより強まり、教養ある貴族の上層も都市奴隷に押し下げられる事例が生じた<sup>96</sup>。下層民の宗教的状況が教養ある層にまで及び、これらの層において古典主義的一般教養は、平衡力としてはもはや十分には作用しなくなった。ここに救済宗教を求める動きが生じた<sup>97</sup>。皇帝の側でも自己神格化を通して、自らの立場を宗教的に固めることが、コンモドゥス以来ほとんど慣例となっていた<sup>98</sup>。

---

<sup>91</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II, S.185.

<sup>92</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II, S.232.

<sup>93</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II, S.232.

<sup>94</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II, S.231.

<sup>95</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II, S.231.

<sup>96</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II, S.202.

<sup>97</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II, S.202.

<sup>98</sup> ヘリオガバルス(Heliogabal)は自らにシチリアの太陽王の名を与え、コンスタンティヌス1世(Constantin)は太陽神・ヘリオス(Helios)と自ら命名した。王位に関しても神学的統合への必要性が生じていた。宗教の強く拘束し、社会を溶接する力を国家の支配下におくことが、現実の地上の国家の統合力が機能障害を強めるなかでますます求められたからである。そこから国家によっ

帝国分裂後の西ローマ帝国が、ゲルマンの異邦人の進撃の下で崩壊した後、その後継者の役割を果たしたのはローマの教会であった<sup>99</sup>。ミラノの司教アンブロジウス(Ambrose)は、卓越した人格性を備え、超世俗権力の代表者として、ローマ皇帝自身に非難的に対抗し、紀元 390 年には、皇帝テオドシウス 1 世(Theodosius I)のテッサロニキの虐殺(Blutbad von Thessalonike)に対し、教会規定贖罪(Kirchenbusse)を課すことを強行した。これに対して、アンブロジウスの受洗者であり文学者であるアウグスティヌス(Augustin)は、「正義なくしては、それは大強盗団の国家にすぎない」<sup>100</sup>という力強い言葉を発した。このようなアウグスティヌスの言葉は、国家に対するローマ教会の自立性並びに独立性に基づいてのみ可能となったものである<sup>101</sup>。

### 3)ゴシック様式とルネッサンス

中世において、修道院付属学校においてなされていた生の芸術としての書簡、計算、合理性は、素人の間にも浸透し、商業活動はそれに応じて組織的並びに勘定的に合理化され、同時に外部との関係では、交通の安全、迅速性と法的安定性が増大する中で、北イタリアとライン川とセーナ川の間地域において、10 世紀以降、それまで遍歴していた商人が定住へと移行し、都市的生活を開始した<sup>102</sup>。このことは司教区の首都などのあった交通の結節点においても現れた。このようにして新しい居住ゲマインシャフトとしての領土的連合体が形成された。司教領域の支配者の支配要求は、商人達の自由権と強い対立関係を引き起こし、商人からなるギルドは、不自由な手工業者からなる全居住者をまとめ上げ、都市支配に対する自由の戦いを展開した。この戦いにおける勝利は自由な帝国直属の都市を作り上げた<sup>103</sup>。遠くにいる皇帝や王の統治権は、初期には自由の保証として作用し、それ以降は自由の侵害として感じられるようになった<sup>104</sup>。

これらの都市の自己統治体制は、当初は貴族的な市参事会の家柄による寡頭政治であ

---

て正教(Rechtgläubigkeit)の概念が引き受けられ、それに対する補充として異端(Häresie)の概念が生じ、そこからの帰結として、異教徒の国家的迫害が生じた。ローマ帝国における正教の実施は、はじめはデキウス(Decius)によって開始され、ディオクレティアヌス(Diocletian)、とガレリウス(Galerius)までの後継者においては非キリスト教の形態において、コンスタンティヌス 1 世(Constantin)以降はキリスト教の形態において実施、強制された。(Rüstow : Ortsbestimmung, II, S.205.)

<sup>99</sup> Rüstow : Ortsbestimmung, II, S.230. 東方において皇帝は、新しい魔力的な手段を用いて皇帝教主義的方法で、社会の統合を手中にもたらしことに成功していた。これに対して西方では、教会が、ローマ司教の指導の下、その自立性を意識的に保持した。皇帝自身の居住地がコンスタンチノーブルに移されたばかりでなく、彼に従属する西ローマの統治者達の場所もミラノ及びラヴェンナに移されたことに伴い、膨大な伝統的特権がローマに居住する教会側に留められ、このことを通して漸次、西教会の承認された領主としての教皇となった。(Rüstow : Ortsbestimmung, II, S.230)

<sup>100</sup> Rüstow : Ortsbestimmung, II, S.231.

<sup>101</sup> Rüstow : Ortsbestimmung, II, S.231.

<sup>102</sup> Rüstow : Ortsbestimmung, II, S.247.

<sup>103</sup> Rüstow : Ortsbestimmung, II, S.247.

<sup>104</sup> Rüstow : Ortsbestimmung, II, S.247.

った。しかしまもなく手工業者-同業組合による家系に対する戦いという形で民主主義の方向への展開が生じた<sup>105</sup>。この方向は統治に関与している全市民の領域をさらに拡大した。同時に教会から布告されたパックス・クリスチアーナ(Pax christiana)に基づき、国際的遠隔地貿易が発達し、それは網状にあらゆるこれらの都市を互いに結合し、この結びつきを近隣の地方やさらには極東にまで拡大した<sup>106</sup>。これらの都市は、あらゆる高次の文化の典型的な成立空間となり、十分に多数の専門家と十分に緊密な共生が可能となっていた。

このような社会学的基礎から、ゴシック様式の時代には、中世都市の文化が生じた<sup>107</sup>。それは教会や大聖堂の天空を目指した崇高さ、祭壇の絵画、輝く教会の窓からなるものであり、同時代においてスコラ哲学の科学的かつ神学的な大業績が生み出された。そしてゴシックの様式とスコラ哲学と間にはスタイルの近親性が指摘されうるのである。

ルネッサンスを除いた中世文化業績においても、古代の遺産が作用していた<sup>108</sup>。しかし、全中世が受けた古代の影響は、ナイーブかつヘレニズムの種類のものであり、反省されない、同時に発展の形式において現れたものであり、意識的に古代ローマ（アウグストゥス時代）の古典主義の形式において取り入れられたものではない。すなわち中世は古代を、「通俗的古代」<sup>109</sup>として継承したのである。

一方、ルネッサンスは、意識的に本源的な「古典古代」に拠ろうとした<sup>110</sup>。イタリアにおいてのみこのような発展が遂行された。イタリアにおいてもまず、中世都市文化の全西洋的な展開が生じ、この西洋に共通の中世の都市文化に付け加える形でルネッサンスは展開された。このことが可能となった理由は、イタリアの当時の諸都市が、ドイツの諸都市などと比較しても、大きな自由を享受することが可能であった点にある<sup>111</sup>。その都市の状況において、かつてのアテネや、紀元2世紀の古代ローマの都市とも類似の社会学的状況が再現されていた<sup>112</sup>。それによってルネッサンスは、中世初めのゴシック様式の全西洋的展開から、時の経過とともに分岐しえたのである。

## 2-3. 政治的不自由への対抗と革命

### 1) 農民反乱と封建領主に対する闘い

---

<sup>105</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II, S.248.

<sup>106</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II, S.248.

<sup>107</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II, S.249.

<sup>108</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II, S.251.

<sup>109</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II, S.251.

<sup>110</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II, S.251.

<sup>111</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II, S.251.

<sup>112</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II, S.252.

14 世紀には、社会革命的性格を持つ農民暴動が 1323 年にフランデル地方において勃発し、その後急速に広まり、農村に接する都市の地方支配者は追放された後、5 年後の 1328 年にこの動きはフランク帝国の王の軍事的干渉によって鎮圧された<sup>113</sup>。それに続いて 1356 年、隣接する北フランク帝国において、ジャックリーの乱が、1381 年にはイングランド南部でワットタイラーとジョンポールの農民反乱が起き、それから中央ヨーロッパで 1419-26 年のフス戦争が生じた。15 世紀中葉以来、南西ドイツ、ザルツブルグなど各地で暴動が生じ、それは 1524-25 年の大ドイツ農民戦争で頂点に達した<sup>114</sup>。

下層民による上層領主に対する抗争の代表的な事例として、現代の北ドイツ、ディットマールシェン(Dithmarscher)の農民の事例を挙げることができる<sup>115</sup>。彼らは、1227 年ボルンヘーフエト(Bornhöved)の戦いへの参加を通して、彼らの古い土地の自由の確認に至った。そして貴族に対してその特権の放棄を要求し、数多くの攻撃に対して抗戦し、1559 年に彼らの民主主義は、領土領主の連合(農民共和国)に到達した。また同じようにスイスでは、1291 年の 3 つのヴァルトシュタット(Waldstätte、原初三州)の結合以降、「農民的原州」(bäuerliche Urkantonen)が現れた<sup>116</sup>。

中世を通じて生じた農民反乱と暴動のうちの 2、3 のものはウィクリフ(J.Wickliff)、フス(J.Huss)、ルター(M.Luther)らの教義に関連していたとともに、すべてのものは当時の慣習法をその正当性の根拠とした。そしてこれらの慣習法は、さらに、当時の神学的一聖書の形態をとった自然法(Naturrecht)によって規定されていた<sup>117</sup>。人々は、そこから封建的支配性の根本的否定という原理を引き出し、同時に急進的な種類の民主主義の目標設定をも伴っていた<sup>118</sup>。

## 2)啓蒙主義と絶対主義

17、18 世紀を通して、西洋の精神史の上では啓蒙主義の間断なき前進と支配が見られた。同時代に政治的領域を支配していた絶対主義は、この精神史上の動きと正面から対峙しなければならず、それ自身で啓蒙主義と連なるものとして、「啓蒙された絶対主義」へと展開した<sup>119</sup>。絶対主義の革命的克服は、事実上の成果として、あるいは結果倫理の意味において、啓蒙主義に関連するが、初期の啓蒙主義においては、絶対主義との近親性を意識し、多くのものを啓蒙するよりも一人を啓蒙する方が遥かに容易で急速になしえることで

<sup>113</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II,S.393.

<sup>114</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II,S.393.

<sup>115</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II,S.394.

<sup>116</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II,S.394.

<sup>117</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II,S.393.

<sup>118</sup> 中世を通じて、封建領主間の戦いと並んで、社会の下層からの封建領主に対する闘いは、成果があるなしにかかわらず数多く見られたが、リュストウによれば、これらの自由の戦いはそこに革命的性格を指摘することが出来るが、近代の領地国家的絶対主義の支配性に対する自由の戦いにおいて生じた革命とは区別されるものである。(Rüstow : *Ortsbestimmung*, II,S.393-394.)

<sup>119</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II,S.396.

あり、信条的絶対主義から啓蒙された哲学的絶対主義への進歩をそれ本来の目的の形で内包していた<sup>120</sup>。このような「領主の改宗」はフリードリヒ 2 世(Friedrich II)やヨゼフ 2 世(Joseph II)の場合において現実に達成された。このような自然法的に啓蒙された絶対主義を頂点として伴った共和国が、啓蒙主義が当初、志向していた政治的理想であった。

### 3)イギリス革命

イギリスでは、古くからほとんど定着させられた都市的「自由」の進行もかかわらず、スチュアート朝による絶対王政が 16 世紀において大きく前進させられた<sup>121</sup>。ここで王政にとって命取りとなった原因となった事象として、リュストウは、カトリック化とフランス化という 2 傾向を絶対王政が同時に推し進めたことを挙げている<sup>122</sup>。

絶対王政に対する古くからの都市的対立者は、カルヴィニズム的ピューリタニズムの反浪費性を特徴として持つとともに、時代とともに金権主義的に富を蓄えた階層ともつながりを持っていた。それに対して宗教的並びに国家的な傾向を持つ君主の行動は、プロテスタントの内部において様々に分派していた信条的諸集団に、共通の敵に対峙する統一を与えた。そしてその敵対性の 1642 年の噴出が、第 1 英国革命を開いた<sup>123</sup>。

また、1649-58 年には、クロムウェル(Cromwell)の独裁が現れた。1658 年のクロムウェルの死後、1660 年以降に同じスチュアート朝からの王、チャールズ 2 世(Karls II)による王政復古と、その後継としてのジェームズ 2 世(Jakob II)の即位が行われた<sup>124</sup>。1688/89 年の第 2 英国革命は、迅速で血を流さない方法において遂行された。ここでは国家統一の不可欠の形態としての合法化された君主制として 1688/89 年にウィリアム 3 世(Wilhelm III)

<sup>120</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II,S.396.

<sup>121</sup> イギリスではすでに農業関係の社会的に基本的な発展は、大陸とは本質的に異なっていた。1381 年のイギリスでの農民の蜂起は、それから 150 年後に起こったドイツの農民戦争の時と同様に、鎮圧された。しかしこれら農民の蜂起が以後にもたらした帰結は、ドイツとイギリスでは大きく異なっていた。ドイツでは、それは大規模な下層農民の形成を通して、先鋭化された社会下層への圧力を形成したのに対して、イギリスではそれにかわって、農民を、牧草地並びに小作地の双方において、耕地の管理者へと移行させる動きが生じた。その結果、大陸的な農民の抑圧にかわって、イギリスではその解放と放逐が現れた。後者はとりわけ、耕地農耕とは対立的に最小数の依存的労働力のみを伴う羊の放牧が極端に労働集約的であることを通して条件付けられたものである。

<sup>122</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II,S.400.また、リュストウは、17 世紀の英国の 2 つの革命の原因として、信条的-宗教的理由と政治的理由を挙げている。信条的-宗教的理由とは、数多くの宗教的方向を一時的停戦に向かわせたことであり、政治的理由とは、憲法的に制限された王の最終的復位がなされたことである。(Rüstow : *Ortsbestimmung*, II,S.400.)

<sup>123</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II,S.401. 第 1 英国革命は 1642 年ストラフフォード伯爵(Grafen Strafford)の処刑によって開かれ、1646 年の君主チャールズ 1 世(Karls I)の処刑において頂点に達した。

<sup>124</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II,S.401.

が現れた<sup>125</sup>。ウィリアム 3 世には、宗派的に多様に分裂した国民内部で宗派的一時停戦を保証する役割が与えられ、この状況から英国の立憲主義が生じた<sup>126</sup>。それとともに、そこから均衡のとれた、そして持続可能な新しい状態の創出がもたらされた<sup>127</sup>。

この早期の、17 世紀の宗派对立から直接的に生じた絶対主義的自由の克服を通して、英国はヨーロッパの政治的發展においても精神的發展においても先頭に立ち、二つの関係においてフランスのルイ 14 世を追い越し、精神的生活のあらゆる領域において、英国は大きく突出して先頭を獲得したのである<sup>128</sup>。

17 世紀の英国の二つの革命において、啓蒙主義における精神的自由への展開は、むしろ革命の最終的成果としてもたらされた<sup>129</sup>。1672 年のチャールズ 2 世、1687 年のジェームズ 2 世による「信仰自由宣言」と 1689 年の「信教自由令」は絶対主義的信条主義の側がもたらしためざましい成果であり、これらの成果がまもなく啓蒙主義の側にも精神的的作用をもたらし、イギリスの啓蒙主義は、絶対主義の段階を通り過ぎ、哲学と認識論の段階においてはロック (J. Locke) とヒューム (D. Hume) が神学的-形而上学的教条主義を根本的に崩壊させ、国家理論においてもロックによる最初の立憲制の理論化がなされたのであった<sup>130</sup>。

#### 4) フランス革命

フランスはルイ 14 世 (Ludwig XIV) の政権時の中頃にはその固有の世俗的發展の最高点に到達したが、その国家と社会の形態は啓蒙されていない信条的絶対主義であった。18 世紀前半においても、フランスは一般的な精神的並びに文化的展開において、あらゆる大陸諸国の頂点に立ちながら、政治的には最も後退していたとすることができるものであった<sup>131</sup>。

この精神と政治の間の矛盾は 1774 年、ルイ 16 世 (Ludwig XVI) の即位によって除去されるものに見えた<sup>132</sup>。すなわちルイ 16 世によるテュルゴー (Turgot) の登用は、長く時機を逸していたフランスの啓蒙された絶対主義への移行を、平和的方法において完遂する最高の機会と見られた。しかしテュルゴーは 1776 年まで在職したものの、彼の改革は特権階級の反対に合い、その諸改革は一部は実行されないままであり、一部は実行されたものの再び以前の状態に戻された<sup>133</sup>。このようにテュルゴーのような博識のある改革者が、全くそ

---

<sup>125</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II, S.401.

<sup>126</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II, S.401.

<sup>127</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II, S.401.

<sup>128</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II, S.403.

<sup>129</sup> 但し、この時点において精神的自由の主張をなしたものとして、ジョン・ミルトン (John Milton) による、「法と公的理性による支配への要請」が存在していた。(Rüstow : *Ortsbestimmung*, II, S.400.)

<sup>130</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II, S.402.

<sup>131</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II, S.403.

<sup>132</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II, S.404.

<sup>133</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II, S.405.

の政治的有効性を開始できなかつたことは、当時のフランス絶対主義の持続不可能性を示すものであった。

イギリス革命において見られた激しく対立する傾向を持つ二つの動きは、ピューリタンの-ブルジョア的感情と絶対主義であったのに対し、フランス革命の場合は、対立する動きの一つは市民性によって駆り立てられた啓蒙主義であった<sup>134</sup>。1789年8月、特権者階級による特権の荣誉ある原則的断念と、人間と市民の権利の宣言によって、革命はその最高点に至ったと同時に、少なくともその基本的目的に到達した<sup>135</sup>。フランスの市民を指導した精神は、当初はロックとモンテスキュー(Montesquieu)によって代表される自由主義がその役割を担ったが、その後、それはホブズ(Hobbes)とルソー(Rousseau)に、そしてルソーの「社会契約」の中に主張されている全体主義に引き継がれた<sup>136</sup>。このような革命の指導的精神の移行は1788年の秋以来開始されたもので、その時点において急進的な時事評論家の何人かが、明示的に、モンテスキューと彼に結びついた抑制主義に背を向け始めたのであった<sup>137</sup>。

#### 2-4. 精神的自由の潮流の連続性

世界史のなかで、西洋の歴史においては、古代、中世、近代を通じて政治的自由の発現が見られた。これを可能としたのは、西洋の精神的潮流からの作用であった。精神的自由は、古代ギリシャにおいて生じ、その後、古代ローマにおいては新ストア主義が、中世

---

<sup>134</sup> また、それと対立するもう一つの動きとしてリュストウは、絶対主義というよりはむしろ封建主義であるとしている。フランスにおいては封建主義は、1683年から1788にかけての絶対主義の弱化的後、再びその敷地を回復していたのである。(Rüstow : *Ortsbestimmung*, II, S.410.) また、これと並んで、フランス国民の動きを動機づけた政治的目的として、国家管理と財政管理の改革の遂行があった。それは租税と財政改革、国家管理の近代化、国内関税の生き残りとし生業の自由の制限の破棄などを内容とするものであった。(Rüstow : *Ortsbestimmung*, II, S.410.)

<sup>135</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II, S.420.

<sup>136</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II, S.422.

<sup>137</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II, S.422. リュストウによれば、カルビニストであるロベスピエール(Robespierre)の政治的実践は、このような精神的潮流の上に位置づけられるものであり、彼の全体主義国家は、同じくカルビニストであるルソーの理論の基礎の上において初めて実現したものである。それはデマゴギー、テロ、略奪、人間における獣性とその最も低位の本能へのアピール、あらゆる自然的並びに道徳的絆の解体などの随伴現象を伴った。(Rüstow : *Ortsbestimmung*, II, S.422.) また、リュストウは、フランス革命では、性格も目標の方向も両極に対立する2つの局面が並立している、としている。すなわち1789年から1792年までの自由主義革命と1792/93以降の全体主義的革命である。そしてここにおいて真実には2つの革命が取り扱われているという点において、1世紀前における英国の動向と同じであり、但し、中間点に当たるものが、英国の場合ほど明確ではない。(Rüstow : *Ortsbestimmung*, II, S.424.)

においてはキリスト教が、政治的自由の成立の上で重要な役割を果たした。また近代以前の革命的動きに関しては慣習法並びに自然法が、近代の革命期においては、イギリスではピューリタニズムが、フランスでは啓蒙主義が政治的自由を実現させる精神史的基礎を提供した。そして精神的自由の連続性の視点からは、古代、ルネッサンス、啓蒙主義、ドイツ古典派という精神史的潮流がその中心をなすものであった<sup>138</sup>。西洋の精神史的潮流においては、政治的自由に向かわせる、自由の「解放する力」としての精神的自由の内容が連続的に保持され続けたことが重要であり、それが政治的自由を継続的に実現させる契機として作用したのである。

精神的自由の潮流が西洋の精神史のなかで連続的に保持された点こそまさに重要である。そしてこの西洋の精神史的潮流の連続性の視点からは、それを可能とした要素として「構造的多様性」(Strukturverschiedenheit)が役割を果たした<sup>139</sup>。精神史的潮流の中に現れたさまざまな思想の体系は、多かれ少なかれ、実証的-現実主義的な要素と形而上学的-理想主義的な要素を両極の要素として保持しており、前者を代表するのがアリストテレス-エピクロスの思想の系譜であり、後者を代表するのがプラトン-ストア主義の系譜である<sup>140</sup>。これらの思想体系の各々が、精神史的後続作用をもたらす形で歴史上に互いに交代して現れた<sup>141</sup>。

---

<sup>138</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II,S.375.

<sup>139</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II,S.375.

<sup>140</sup> Rüstow : *Ortsbestimmung*, II,S.375.

<sup>141</sup> 例えばストア主義は、神学的-形而上学的要素を保持しつつ、キリスト教徒の綜合が不可能な、それと競争する関係において存在したがゆえに、キリスト教に先行した形で、紀元2世紀にはローマ帝国の国家宗教として取り入れられようことが可能であった。アリストテレスの思想はキリスト教と親和性を持ったがゆえに、中世以来、盛時スコラ哲学においては事実上、そして唯名論的後期スコラ哲学においては少なくとも形式上、神学的正教の内部に取り入れられることによって、教会による西洋の精神的遺産の保持の上で役割を演じた。それに対してプラトンの思想は、一部を除いて教会の立場からは非常に危険なものとして排除され、罰則を設けて禁じられた。しかしまさにこの異教的熱狂の力が、ルネッサンス期の空想的-神秘的-自然哲学を呼び起こした。ストア主義は、16世紀末から17世紀中葉にかけて、ヒューマニストや教養人によって初めは文献学的理由から取り上げられるようになり17・18世紀においては大きな精神的影響を与えるようになった。ストア主義の影響はしばしば匿名的に現れたのであり、啓蒙主義における固有の宗教としての理神論(Deismus)は、古代ストア哲学の近代における更新であった。啓蒙主義における「自然」「理性」という基礎概念はストア主義に由来するものであり、その点からは経済学の創始者アダム・スミス(Adam Smith)もストア主義者であったとすることができる。ストア主義がキリスト教と本質的に対立する点は、世界や人間性の把握における理想主義的なオプティミズムであり、それはルターやカルヴァンが先鋭化したキリスト教の罪悪的パシビズムとは反対のものであり、啓蒙主義のオプティミズムはこの古代のストア主義の起源に由来しているのである。(Rüstow : *Ortsbestimmung*, II,S.376-379.)

### 第3節 実質的自由と現代の文化的・社会学的状況

リュストウが全世界史的基礎付けとして描いた歴史は、ヨーロッパにおける自由主義の伝統、民主主義が成立した背景として整理されているのであるが、この点はある意味では、彼の捉える現代文明における西洋優位、西洋中心主義的な側面を反映していることは否定できない。

リュストウの盟友レプケは、リュストウの議論を受け入れたものの、「ネオリベラル」という表現を拒否していた。しかしリュストウは「ネオリベラル」という表現を積極的に称していた。なぜリュストウは「ネオリベラル」を称したのだろうか。この点に関しては、本稿で対象とした主要著作の以前に書かれた彼のもう一つの代表作としての『経済的自由主義の機能障害』<sup>142</sup>における彼の立場と関連していると考えることが出来る。すなわちここにおいてリュストウは古い自由主義の精神的欠陥を明らかにし、その欠陥を克服した先にあるものとして自らの新自由主義の立場を置いているからである。

リュストウの議論は、全体主義が猛威をふるった世界の中で、時代に抗して自由の意義と正当性を主張する点で大きな意義を持った。さらには、戦後の冷戦構造において共産主義圏に対抗して自由主義の普遍性を主張するという点でも、大きな役割果たした。では全体主義や冷戦構造が背後に退いた時代にあって、その議論を取り上げることの現代的意義はどこにあるのか。この点に関して、とかく競争秩序一元論と批判され、歴史的視点がとられることが少ない新自由主義者たちの議論の中にあって、彼の示した歴史的基礎付けの立場は、自由の基礎付けの観点に新たな視点を提供している点が重要である。すなわちリュストウの歴史-文化社会学的考察を通して、自由が様々な諸活動（科学・文化）に対して展開の新しい可能性を開いたという側面が明らかにされている点を指摘できる。このような事例は、紀元前に世界史上に最初に現れたイオニアでの自然科学の大規模な発達の事例やルネッサンス期における人間中心主義的な文化・芸術の発達の事例において確認されるものである。いずれの場合にもそれらの自然科学や、文化・芸術の発達に先行して、社会の市民層は、前後の歴史的状況と比較できない程度の大きな自由を享受していた。このように、世界史的に重要な転換点となった自然科学の成立、並びに文化・芸術の高度な発達に先行して現れた自由の成立を歴史的に実証している点にリュストウの歴史的文化的批判の意義を認めることが出来るのである。

また、その人間観にもとづき、独自の文化的・社会学的な視点からの考察が、現代の人間の置かれている状況を理解する重要な示唆を提供している。この点に関して、リュストウがみずからを新自由主義であると主張している点からして、自由という観点から、彼の政策論的な主張も念頭に入れてさらに考察することは必要かつ有意義な事であろう。そのように考えた場合に、リュストウにおいては、自由という概念が二つの意味において

---

<sup>142</sup> Rüstow, A. : *Das Versagen des Wirtschaftsliberalismus*, 1932.

展開されているように思われる。第一は、形式的な意味での自由である。これはまさに支配のない状態を意味しており、支配とは両立し得ない論理的対立物をなす。リュストウの古い自由主義者（Paläoliberalismus）に対する批判はこのような意味での自由に関連していた<sup>143</sup>。

古い自由主義者は、この意味での自由ならびに市場経済が、調和的均衡へともたらされると主張した。「レッセ・フェール」を信奉したかつての自由主義は、市場法則の自己充足性、その無制限の妥当性という誤った確信にもとづき、市場経済の有効な機能に必要な枠条件を軽視した。そしてこの誤った理論に基づいて実践に移されたかつての市場経済は、それに不可欠なこの「枠条件」の保全がなされないまま、19世紀の後半以降、「独占主義的」、「干渉主義的」、「多元主義的」と形容されるようなその退化形態を顕在化させたのである。リュストウによれば、市場機構の満足ゆく機能は無制約に妥当するものではなく、特定の社会的-制度的な枠条件の充足に依存している。

リュストウにとって形式的な意味での自由と並んで重要なのは第二の実質的な意味での自由である。そしてこれはすでに数回述べた Vitalsituation という概念を軸に表現される人間の社会的状況に他ならない<sup>144</sup>。人間は、社会へと埋め込まれることを通して、また自己責任、生活の安定を手に入れることによって、Vitalsituation の意味において自由となる。またその成立は、内的緊密性を持ったゲマインシャフトが回復されることによって可能となる<sup>145</sup>。彼は、社会一般の結合関係を表すにあたって、統合（Integration）という概念を用いている。彼によれば、人が真の安定、精神の平静、幸福感を得るためには、互いに人格的關係にあるような共同体的構造の内に埋め込まれていることが必要である。そのためには、人々が緊密かつ概観可能な関係に立てる構造が社会のさまざまな段階において作り出されなければならない。すなわちそれは、社会のいわば細胞であり人にとって最も身近な構成体である家族に始まり、近隣共同体的な組織を経て、社会一般のゲマインシャフト的構造へと至るような形式においてである。

社会の統合とともにしばしば強調されるのが経営の規模や経営形態などの問題であり、ここでは生活の重要な部分を占める労働における人間の Vitalsituation が問題となる<sup>146</sup>。ここに求められるのは生産活動における自律的決定、自己責任と自己処分の確立、業績と報酬

---

<sup>143</sup> Rüstow : *Das Versagen* ....a.a.O.S.68.

<sup>144</sup> ここで「形式的な自由」と「実質的な自由」として自由を二つの視点から見る区分は、たとえばアイザイア・バーリンの「消極的自由」と「積極的自由」の分析とも通底するものであり、リュストウに固有のものということは出来ない。ドイツ語圏においても、たとえばダーレンドルフは「ライフチャンス」を鍵概念として、現代社会における上記の2つの自由を統合的に止揚せんとしている。従ってリュストウにとって固有の実質的自由の内容とは、Vitalsituation という概念を中心に展開される一連の諸議論の内容であると言うことができる。

<sup>145</sup> Rüstow, A.: *Vitalpolitik gegen Vermassung*. In : Hunold, A. (hrsg.): *Masse und Demokratie*, Erlenbach – Zürich, Stuttgart 1957, SS.237-238.

<sup>146</sup> Rüstow, .: *Vitalpolitik* ....a.a.O., S.229f.

との有機的な結びつき、労働の場における共同体的な構造の確立などである。また個々の経営の内部における連帯性の回復。すなわち大規模な経営ではしばしば階級闘争の形態をとる企業内の上下の関係においても、また日々の労働成果を共にする成員間の横の関係においても、健全な経営連帯が作り出されること。あるいは広範な層に常に昇進の可能性が開かれていること。そして経営内部における労働の有意義な細分化を通して、個々人に自然に経営全体の枠組みを概観しうるような相対的独立性が保証され、また彼らに責任ある役割が割り当てられていること。そして何よりも経営の規模自体をできるかぎり中・小規模にとどめておくことが要請されるのである。

また彼は、市場の競争とそれを取りまく人間性に則した構造という関係を、狭義の社会の構成原理にとどまらず、文化的、精神的な領域をも含んだより広い次元から捉える視点も提供している<sup>147</sup>。それと並んで、市場または経済的な原理一般に対して、その外にあって人間的諸価値にかかわる事象をより重要となすような価値上の関係を想定しており、その根拠として、しばしば、経済の手段的性格が強調される<sup>148</sup>。またこれらの視点は、競争あるいは経済的原理が、それ本来の位置を離れて過度に強調されることへの警句へとつながり、ここから市場経済のもたらす経済的生産性が一定の制約を受ける可能性が導かれる<sup>149</sup>。市場経済は、倫理的・社会学的作用においては全く「中立的」とであるとされる<sup>150</sup>。

形式的意味での自由と実質的意味での自由とは一致するものではない。前者が回復しているが、後者がますます悪くなるという状態が考えられる。現代に至る展開とはまさに、法治国家への展開や、市場主義、民主主義の展開の内に、前者の意味で支配を排除していきこうという傾向がかなりの程度実現されてきた反面、それと同時に社会的、経済的次元ばかりでなく、文化的、精神的次元に着目しても、さまざまな変容と諸問題が現出している。個人主義化と社会のゲゼルシャフト化、経済の資本主義的変容、自然支配と環境破壊、国家の多元主義的解体、技術への信仰、合理主義、物質主義など。後者の意味において、これまでになく本来の意味での人間の自由に重大な影響をもたらさうる時代であると言うことができる<sup>151</sup>。

<sup>147</sup> このようなものとして、彼は、Markt と Marktand (ないしは Rand) という対概念を示している。

(Rüstow, A. : Paläoliberalismus, Kommunismus und Neo-liberalismus, in: *Wirtschaft, Gesellschaft und Kultur*, Berlin 1961. S.68.) また、リュストウは、市場を取り巻く精神的態度について、それが一種の連帯精神、すなわち公正なスポーツ競技における競争感情のごとく競争の外では連帯を求めるような精神でなければならいと主張している。(Rüstow, A. : *Zwischen Kapitalismus und Kommunismus*, in: *ORDO Bd.2*, 1949, S.107-108.)

<sup>148</sup> Rüstow, A. : *Wirtschaft als Dienerin der Menschlichkeit*, in: *Rede und Antwort*, SS.76-91. 経済は、主に物財の調達にかかわる領域であり、人間生活の不可欠の物的基礎を形成し、それなしでは経済外のあらゆる事象は存立しえない。しかし一方において、人間的な事象から離れた経済そのものは決して自己目的とはならない。(Rüstow, A. : *Paläoliberalismus*, ....a.a.O. S.68.)

<sup>149</sup> 経済一般について言えるのと同じように生産性もまた、それが経済を超える社会的・倫理的な要請に奉仕して初めて意味を持つのであって、それ自体が自己目的化されてはならない。(Rüstow, A. : *Wirtschaft als Dienerin*, ....a.a.O.S.79.)

<sup>150</sup> 競争自身は、個人的に道徳的にも、社会的に統合的にも作用しない。この点において市場に期待されるのは、ただ「市場外の統合の可能性を妨げないこと」のみである。(Rüstow, A. : *Das Versagen* ....a.a.O.S.50.)

<sup>151</sup> 野尻武敏『選択の時代』新評論 1980年 第12章。